

1 患 者 情 報

(1) 平成 22 年のトピックス

ア 平成 22 年 腸管出血性大腸菌感染症のまとめ

平成 22 年の年間報告数は 34 例で、平成 11 年 4 月以降では、平成 11 年（26 例）、平成 12 年（33 例）に次いで少なかった。型別では、O157 が 30 例（88.2%）、O111 が 2 例、O26、O103 が各 1 例であった。推定感染地域は、すべて国内であった。HUS 症例の届出、死亡例はなく、集団発生事例は 2 事例（感染者 8 名）であった。年齢階級別では、10 歳未満の感染者は、1 例（0 歳 4 箇月、散发事例）で、例年に比べて少なかった。

(ア) 集団発生事例について

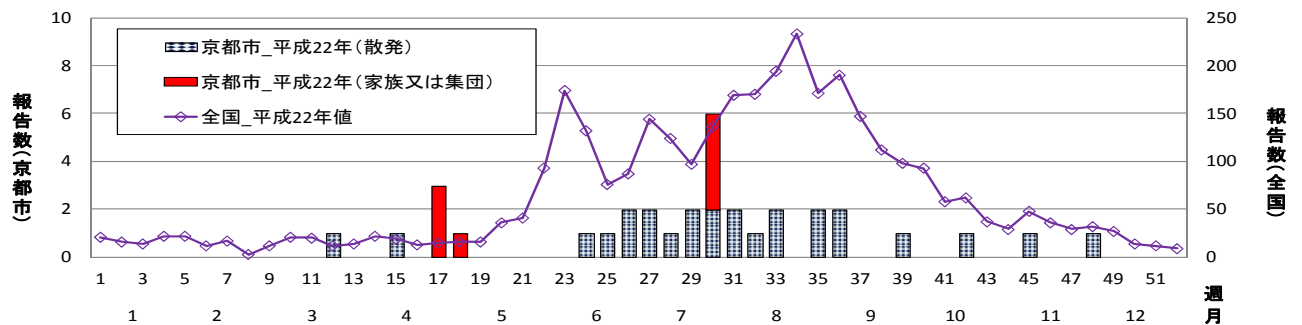
2 事例とも飲食店での集団感染で、型別は O157(VT1VT2)/H7

年齢は、事例 A(4 名、西京区) 12～35 歳、事例 B(4 名、山科区) 17～18 歳

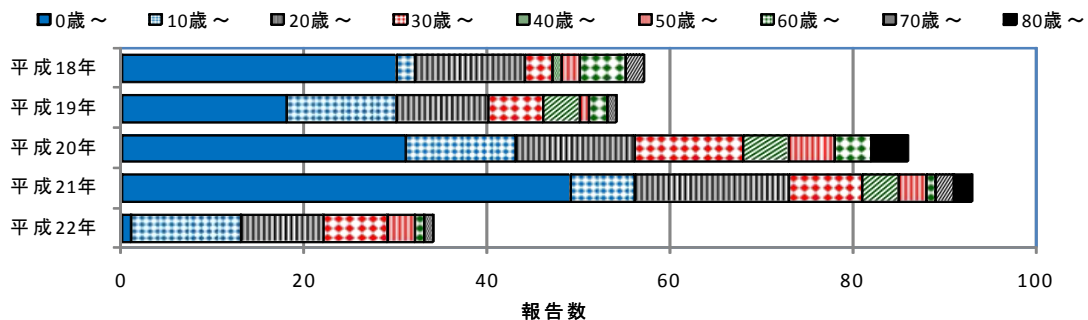
診断年別型別詳細

診断年	合計	O26	O91	O103	O111	O121	O145	O157	その他
平成 11 年 4 月以降	26							25	O1 が 1 例
平成 12 年	33	8						25	
平成 13 年	52	8			1			43	
平成 14 年	35			1				32	O165, O 型別不明が各 1 例
平成 15 年	101	5						96	
平成 16 年	48	2				4		42	
平成 17 年	36	5	1					30	
平成 18 年	57	2				1		54	
平成 19 年	54	2			3			49	
平成 20 年	86	34		5	2		3	41	HUS 患者のため型別不明が 1 例
平成 21 年	93	8	1		3	1	1	79	
平成 22 年	34	1		1	2			30	

本市及び全国の報告数の推移（平成 22 年）



年齢階級別報告数の推移（平成 18 年～平成 22 年）



イ 平成22年 インフルエンザのまとめ

(ア) インフルエンザの報告数

平成21年～平成22年シーズンの流行は、例年の流行より早く、平成21年10月にピークを迎え、平成22年～平成23年シーズンの流行は、平成23年1月にピークを迎えた。そのため、平成22年には、流行のピークがなく、報告数（2,139例）が激減した。

(イ) インフルエンザウイルスの型別

検出されたインフルエンザウイルスの型は、平成21年～平成22年シーズンはAH1(pdm)が主流であったが、平成22年～平成23年シーズンでは、AH1(pdm)の他、AH3(香港型)やB型も検出されている。

(ウ) 年齢階級別

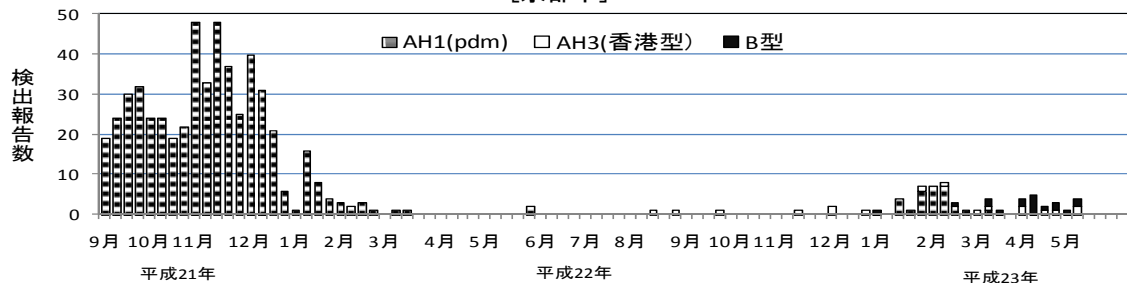
年齢階級別割合では、20歳未満が、平成21年には75.7%と多かったのに比べ、平成22年には、54.6%となった。

京都市のインフルエンザの推移（平成21年～平成23年シーズン）

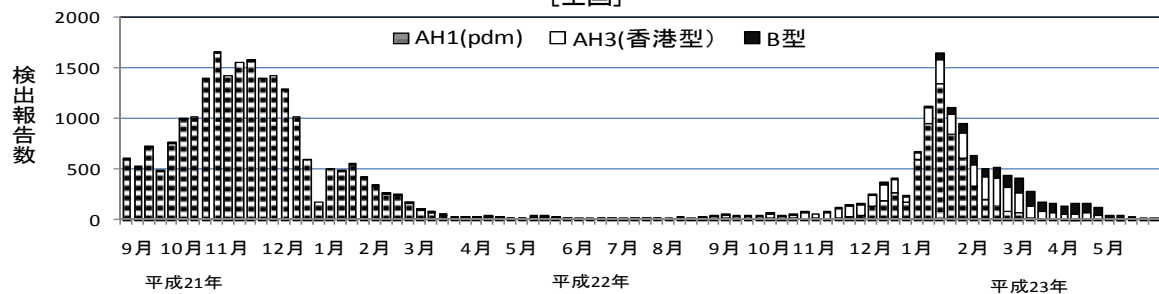


インフルエンザウイルス型別報告数（平成21年～平成23年シーズン）

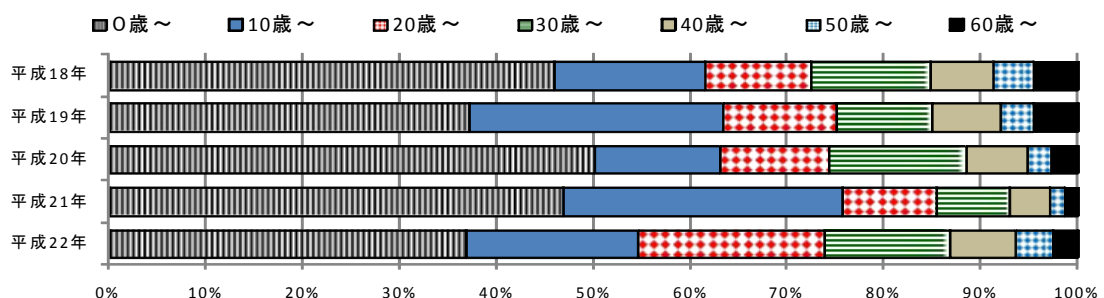
[京都市]



[全国]



京都市のインフルエンザの年齢階級別割合（平成18年～平成22年）



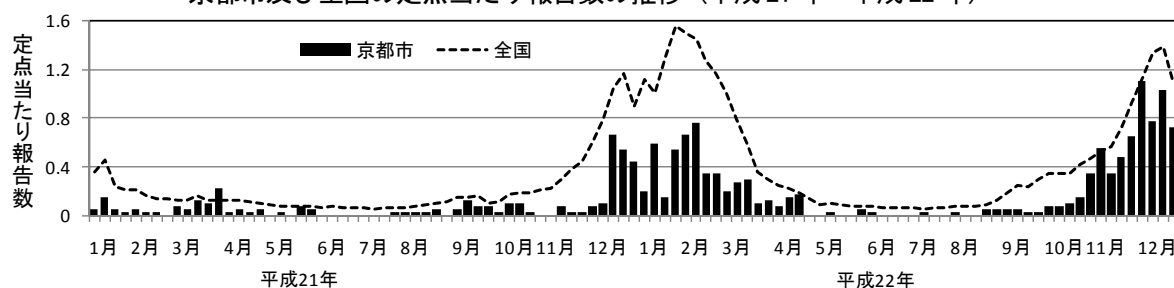
ウ 平成22年RSウイルス感染症のまとめ

平成 22 年の報告数は、定点把握対象に指定された平成 15 年以降、最も多かった。例年、報告数は 10 月から 12 月に増加するが、平成 21 年のピークが平成 22 年にずれ込み、平成 22 年は、2 月と 12 月に 2 つのピークを形成した。また、2 つのピークのいずれもが過去に比べ高く、累積報告数は、過去に最も多かった平成 20 年の 2 倍以上となった。

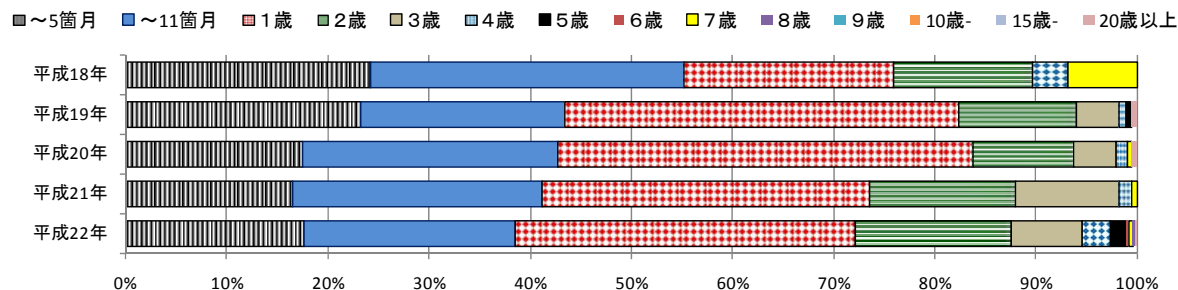
年齢階級別割合では、重症化しやすい5箇月以下の割合は17.5%で、1歳以下の占める割合は72.2%であった。

病原体定点からのRSウイルス感染症の18検体から、RSウイルス5例を検出した。上気道炎等RSウイルス感染症以外にも、RSウイルスを、27例検出した。

京都市及び全国の定点当たり報告数の推移（平成21年～平成22年）



年齢階級別割合（平成18年～平成22年）

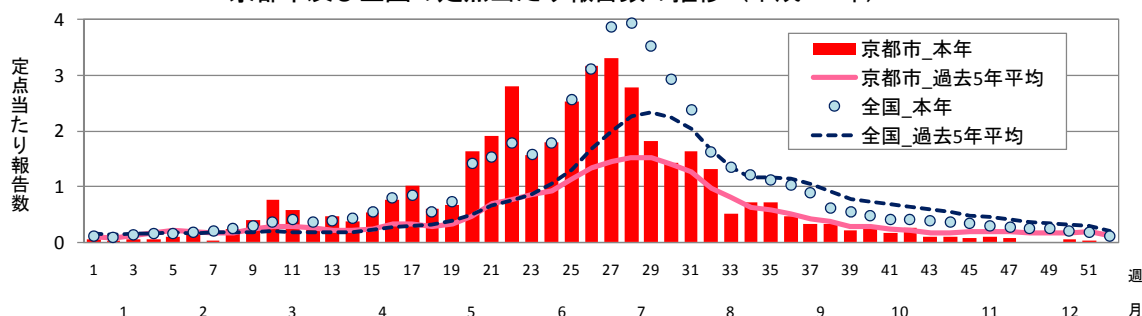


エ 平成22年 手足口病のまとめ

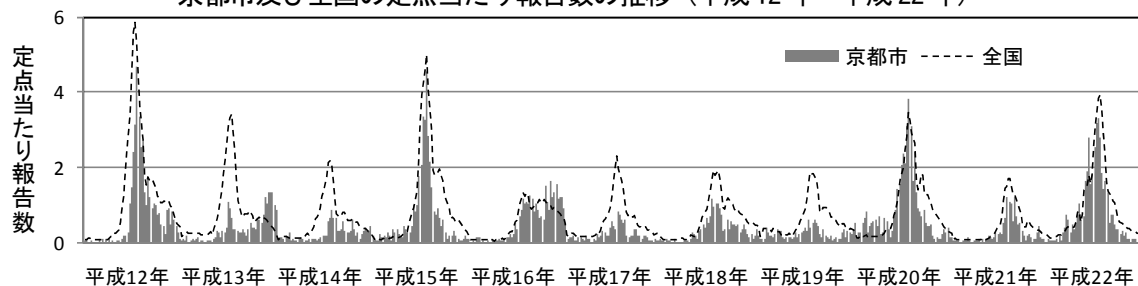
平成22年の報告数は、第8週（2月22日～2月28日）以降、過去5年平均値を上回る状態が続いて、大きな流行となった。過去10年間と比べると、ピーク時の定点当たり報告数は、平成12年（4.68）、平成15年（4.54）、平成20年（3.80）に次いで高く（3.32）、累積報告数（1,618例）は、平成20年（1,729例）に次いで多かった。

病原体定点からの手足口病の検体から、中枢神経合併症の発生率の高い、エンテロウイルス71型(EV71)を8例と多数検出し、無菌性髄膜炎の検体からも、EV71を6例検出した。

京都市及び全国の定点当たり報告数の推移（平成22年）



京都市及び全国の定点当たり報告数の推移（平成12年～平成22年）



平成12年～平成22年の累積報告数

	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年	平成18年	平成19年	平成20年	平成21年	平成22年
累積報告数	1,548	831	500	1,423	1,223	438	709	512	1,729	513	1,618

病原体定点の手足口病検体から検出されたウイルス

	EV71	CA5	CA6	CA10	CA16	Ad31	その他	合計
平成12年	3						2	5
平成13年	1						1	2
平成14年					6			6
平成15年	1		1				1	3
平成16年								0
平成17年								0
平成18年							1	1
平成19年								0
平成20年					1		1	2
平成21年			1	1			1	3
平成22年	8	1	2			1		14
合計	13	1	4	1	7	1	7	36

EV71:エンテロウイルス 71

CA5:コクサッキーウイルス A5

CA6:コクサッキーウイルス A6

CA10:コクサッキーウイルス A10

CA16:コクサッキーウイルス A16

Ad31:アデノウイルス 31

オ 平成 22 年 伝染性紅斑と流行性耳下腺炎のまとめ

伝染性紅斑及び流行性耳下腺炎は、数年おきに流行がみられる疾患で、平成 22 年にはどちらも流行年となった。

(ア) 伝染性紅斑

伝染性紅斑は、過去 10 年間では、平成 13 年～平成 14 年、平成 18 年～平成 19 年に流行した。

平成 22 年の定点当たり年間累積報告数は、12.22 で、平成 18 年 (27.41)、平成 14 年 (19.07)、平成 13 年 (18.17) に次いで多かった。

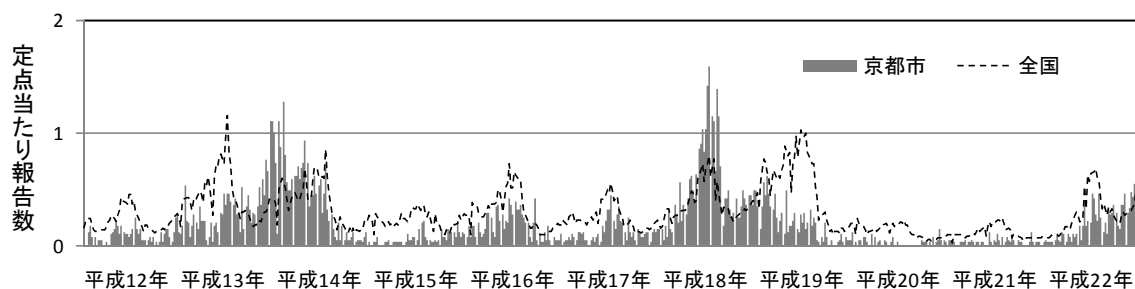
(イ) 流行性耳下腺炎

流行性耳下腺炎は、過去 10 年間では、平成 13 年、平成 17 年～平成 18 年に流行した。

平成 22 年の定点当たり年間累積報告数は、44.86 で、平成 13 年 (74.61)、平成 17 年 (47.12) に次いで多かった。

京都市及び全国の定点当たり報告数の推移（平成 12 年～平成 22 年）

【伝染性紅斑】



【流行性耳下腺炎】

